

第21回 白梅保育セミナー

いま保育に問われていること ～新制度のもとでのこれからの保育者の学びをさぐる～

2015年12月6日(日) 10:00～16:10

白梅保育セミナーは、「いま保育に問われていること」をテーマに、毎年、これからの保育を見据えた課題を考えてきた。今回の第21回保育セミナーでは、「新制度のもとでのこれからの保育者の学びをさぐる」をテーマとした。子ども・子育て支援新制度が2015年度から施行され、保育システムが新しくなった所でも、現場ではより質の高い保育を目指していくことに変わりはない。学び続ける保育者にスポットをあて、全体講演3つと分科会2つのプログラムを企画し、定員を越える多数の参加者があり、スクリーン会場を含むJ棟の2会場での開催となった。

教育・福祉研究センター運営委員の小林を責任者として、松永（子ども学科）、佐久間（発達臨床学科）、花原（保育科）の各教員にセミナー運営委員として、協力いただき、全体講演Ⅰでは保育者が学び続けることについて、全体講演Ⅱでは、幼児期に育てる資質について、全体講演Ⅲでは、保育者の研修について大変示唆深い講演をしていただいた。分科会では、実践報告を中心に、分科会Ⅰでは、地域一体型研修を行っている舞鶴市の報告から保育の質の向上について、分科会Ⅱでは、学童期の発達障害児の二次障害の報告から幼児期に必要な支援について、講演をもとに参加者と一緒に考えた。丸一日のプログラムであったが、熱心な参加者とともに学ぶことのできたセミナーであった。

(小林 美由紀)

全体会Ⅰ 保育者たちは、どこで、何を
どう学んでいるのか
～学び続けるということ～

講師 汐見 稔幸（白梅学園大学・白梅学園短期大学学長）

新制度における保育の実践における、「なぜ学びが強調されるのか」について話された。①教師、保育者の教えることが主体となる形から、子どもの主体の「学び」を強調する形になってきた。②自発的な育ちの強調、教えなければ育たないのではなく、自分の形成をどうコントロールしていくかという分析が大切である。③遊びの大事さの見直しと、それが教育的意味を持つことの主張がされるようになってきている。

次に、遊びをどう意味付けるかについて話された。Play から Play and Learning(P&L)へ：遊びの中での学びから遊びを通して結果としての学び：これは、「学び」という視点と「育ち」という視点があり、遊びの中で、何を学んだか、何が育ったかを記録していく必要がある。保護者は学びより「育ち」を知りたいが、そこで形を大事にする保育をするのではなく、心の中の深い変容を記録することが大切である。子どもは、試行錯誤しながら育つということを保育の場でも浮き彫りにして行くことの大切さを話された。

保育者の学びについては、実践知の深化としての学びが必要で、人間、文化、社会の全てから学ぶことが大切であることを話されたが、講演時間の関係で、まだまだ聞きたいという感想が多くあった内容だった。

(小林 美由紀)

全体会Ⅱ 幼児期に育成すべき資質・能力とは
講師 無藤 隆（白梅学園大学大学院子ども

学研究科長)

本講演では、幼保の改革の動向の資料に基づき、「三つの連続性」という点から、現在進行中の制度的な改革の状況について解説された。

①幼保をつなぐ

幼稚園教育要領と保育所保育指針が現在改訂作業中であり、3歳以上の5領域の保育内容については、共通のものにしていくよう議論している。認定こども園への移行の推進について、移行に伴う不利をなくすように、来年度中に軽減作業が進んでいく予定である。また福祉と教育の重なりという点からも、障害のある子どもを抱えた家庭への支援の重要性は高まっており、福祉も教育も幼・保・小で共に担わざるを得ない時代である。

②幼児教育と小学校教育をつなぐ

幼小の接続を進めて行く必要がある。特に基本的な力を伸ばしていくという考え方が重要である。接続期のカリキュラムを拡充し、移行の足踏みを生じさせず、幼児期で育った力を引き受けて、そのまま育てて行きたい。

幼児期に育てたい基本的な力として、知力面、情意・協同面、気づきの面から捉えていく必要がある。これらの基本的な力を伸ばしていく上で、幼児教育と小学校低学年教育の各々の指導の向上が必要である。さらに子どもの個人差に応じ、格差を是正するという問題意識を持つことが大切である。

③養成校と現場園をつなぐ(養成と研究をつなぐ)

現在、現職教員の研修のあり方を変えようとしていて、また養成についても教職課程の質保証のために、改革が進む予定である。具体的には、養成校の責任体制を明確にする、第三者評価を教職課程に導入する、養成校の教員も研修を受けるなどである。大学の教職課程だけでなく、現場での研修と連続して教員を育てることを考えるべきである。そのポイントとしては、採用前研修、初任研修、メンター制度、さらに保育者のキャリア・ラダーを確立することが必要であろう。保育者自身が研修等を受け、学び続けるためには、上位

資格のあり方、昇進へのインセンティブ、大学院での学びという点から考えることができる。

(佐久間 路子)

全体会Ⅲ 新制度における保育者の研修を考える

～実践の可視化と質の向上をめざして～

講師 北野 幸子 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科 准教授)

教職・福祉職の高度化の中で、保育職の専門職としての専門性を可視化し、質の向上を目指すにはどうしたら良いかを、新制度における保育者の研修から解説した。保育の専門性を省察的に積み上げて行くためには、最低基準の保障を行っていく必要がある。教育基本法9条では、養成と研修の充実に公的責任があることが定められている。省察的实践家となるためには、実践をマニュアル化するのではなく、振り返りや学びの継続が重要である。研修は自助努力ではなく、業務の内容として行う必要がある。研修を可視化して、保育の質の向上をするために、記録を充実させることが不可欠である。研修組織は、極端な自助グループでも批判グループでもなく、同僚性意識を形成する信頼感を培う必要がある。研修方法も受動的研修ではなく、能動的研修を充実していく必要がある。さらに、研修をどう活かすか行動目標を立てて考える。園内研修も、語る、考える、保育を創る、公開保育からアクションリサーチの成果として結びつけ、課題を抽出し解決することで、実践の質を向上して行く。この研修も個人の責任から、組織のマネジメントをさらに制度へ進めて行くことを目指して行きたい。

(松永 静子)

分科会Ⅰ 実践報告：舞鶴市における地域一体型研修の試み

～新たな時代に向けて、
今始められることは？～

講師 北野 幸子 (神戸大学大学院人間発

達環境学研究科 准教授)

コメンテーター 汐見 稔幸

舞鶴市における地域一体型の研修のきっかけは、新システム＝新しい時代に始められること＝待機児童のいない地方こそ質の向上の必要性を考え、行うことになった。質を考えたときに「公開保育」を条件に協力をさせていただくことになり、保育の「実践」こそを、ターゲットにしたいと考えた。

プロジェクト型保育推進事業として、保育の質の向上研修とし、保育の独自性と専門性を高めるために、小学校教育の前倒しではない、英才教育ではない、でも見守るだけではない保育を行うことを目指した。

さらに、地域一体型研修の体制とし、公私を越えて、園種を越えて、実践現場と研究機関を越えて保育現場・行政・研究機関の一体化となるようにするために、保育を観る、保育を語る、保育を考え共に創るということをした。

具体的な事業の内容は、公開保育、カンファレンス、ワークショップ型研修、全体会、報告会、報告書等の作成、ニュースレターの発行を行い、派生的に自主的な勉強会も起こった。

現象としての保育の可視化はドキュメンテーションに関する研修を行い、保育の可視化で保育の楽しさの再発見し、専門職としての自負につながった。この成果は、保育者の変化だけでなく、保育実践の変化、保護者の変化となった。

分科会Ⅱ 発達障害児の二次障害

～学童期の育ちから考える

保育のあり方～

講師 廣澤 満之(白梅学園大学子ども学部発達臨床学科 准教授)

講師 林田 道子(NPO 法人 I am OK の会 代表)

新制度に移行して、障害のある子どもの小学校教育との接続がさらに課題として求められている。接続期のカリキュラム等については、幼稚園・保

育園、小学校における実践も多くなり、地域での包括的な取り組みも行われている。一方で、このような接続期という短期的な視点だけではなく、長期的な視点で振り返る必要もある。このような点を踏まえ、学童期の発達障害児が抱えやすい“二次障害”について、卒業後の進路も見据えた幼児期に必要な支援について廣澤 講師より、事例を紹介されながら、発達障害の二次障害についてモデルを説明された。次に林田 講師より、発達障害児をもつ親の会を立ち上げ、発達障害児や親の支援をしながら、子どもも支援だけでなく、親支援が必要で、特に乳幼児期が大切ではないかということ話をされた。母親の障害受容の時期がかなり違い、子どもの問題行動や困ったことについて、子ども目線でするだけでなく、親が受け止められる状況にあるかが難しい。ペアレントトレーニングが有効で、親が初めから養育感を構築し直さなければいけない。さらに、廣澤 講師より、二次障害を防ぐためにできることについて説明された。課題のある子を取り巻く構図では、一面的な見方を多面的にとらえるようにすることの必要性と他児の保護者も巻き込んで行っていくことの大切さと保護者の「子育て」が肯定される体験について説明された。子ども理解の多面性では、「わが子と分かり合える実感」子どもの「成長した面」と「次の課題」の明確化を話された。会場からの質疑応答では、具体的な対応の仕方について活発な質問があり、それぞれの講師から具体的に答えていただいた。

(小林 美由紀)